

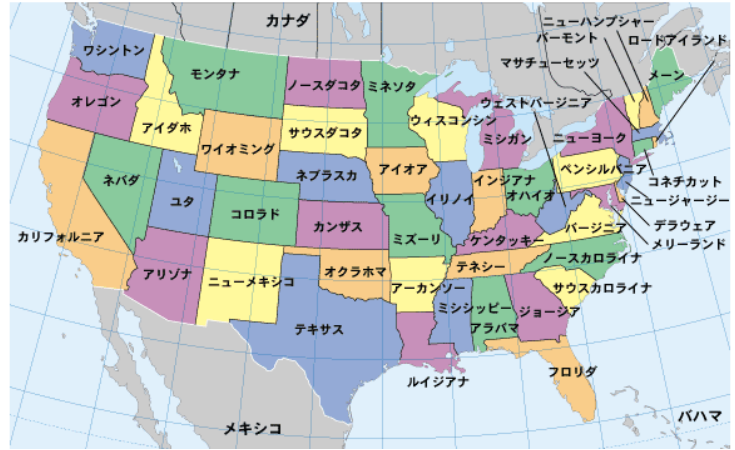
アメリカ合衆国 シカゴ日本人学校に勤務して

前 アメリカ合衆国 シカゴ日本人学校
現 旭川市立知新小学校 教諭 山名 正記
(派遣期間 H20~23年)

1 はじめに

1 はじめに

政治・経済・文化など、あらゆる面で日本とのつながりの深い国「アメリカ合衆国」。その中でも、全米3位の人口を誇るシカゴにある「シカゴ日本人学校」に平成20年4月から平成23年3月までの3年間、在外教育施設派遣教員として勤務した。



ここでの3年間で、シカゴの地だからこそできる教育や現地校（アメリカの学校）訪問、さらには、科学館や博物館などの施設見学など、貴重な経験をたくさんさせていただいた。その一端を紹介していきたい。

2 シカゴの地理とその歴史

2 シカゴの地理とその歴史

シカゴは、ニューヨークとロサンゼルスに次ぐアメリカ第3の都市である。人口はおよそ300万人、周辺地域の人口を含めると918万人に達するという中西部最大の都市である。北アメリカ大陸のやや北東、五大湖の一つであるミシガン湖の南西に位置している。四季はあるが春秋は短く、夏は暑く冬の寒さは厳しい（冬の寒さは旭川ほどではないが）。冬季には年に数回、華氏0度（摂氏-18度）を下回ることもある。



- ・人口
- ・位置
- ・気候

古くから交通・物流の中継地として栄え、国際ビジネスの一大拠点となっている。日本企業も数多く進出している。

高層建築が建ち並ぶこの街は摩天楼発祥の地として知られている。各時代を代表する様々なビルが林立し、街全体が建築物の博物館の様相を呈している。観光に訪れる人も多い。

シカゴというとギャングの街のイメージがあるが、それは昔の



・治安

こと。現在はシカゴ市警の努力により、比較的治安のよい街になっている。日本人が多く住むシカゴ北西部の街であれば、日本よりも治安がよい程で、大変過ごしやすい街である。

オヘア空港



・交通

シカゴは、先住民との戦いを終えた後、西部開拓の入り口として栄え、鉄道や運河など交通の要所として発展を遂げてきた。現在も世界最大規模を誇るオヘア空港を抱え、全米一の交通の要であることに変わりはない。

南北戦争以後、軍需産物資の生産、穀物や家畜の取引、農業機械の生産などで、目覚ましい発展を遂げたシカゴであるが、1871年には大火に見舞われる。その後、高層建築物が盛んに建てられ、シカゴは摩天楼発祥の地として知られていくことになる。摩天楼というとニューヨークを思い浮かべるが、その発祥は意外にもシカゴだったということである。さらに、復興中は、建築家や芸術家に多くの活躍の場を与えたことで、ダウンタウン内に多くの建築やモニュメントがある。

・昔のイメージ
(マフィア)

20世紀に入ると、アルカポネに代表されるマフィアが暗躍する時代となる。シカゴというと犯罪をイメージする人が多いのもこのためである。しかし、むしろそのような時代があったからこそ、現在は治安がよく、とても住みやすい都市になっている。



その他、20世紀になってこのシカゴを中心に発達し、世界の文化に大きな影響を与えたものに、シカゴ・ブルースやジャズなどがある。シカゴ美術館やシカゴ交響楽団などの文化的な施設や団体も多い。さらには、科学産業博物館やシedd水族館、フィールドミュージアムなどの大きな施設もある。年間を通じてのイベントも多く、大人から子供まで楽しむことのできる街である。

・モニュメント



巨大ビーン



ピカソ作



カルダー作

3 シカゴ日本人学校の教育
(1) 設立

3 シカゴ日本人学校の教育

(1) シカゴ日本人学校の設立

企業のアメリカ進出が活発になり始めた1950～60年代、滞在が長期化する駐在員の悩みの種は、子どもの教育であった。日本語力の維持・向上や帰国後の進学に備えての日本語による学力の向上、また、現地校に適応困難な児童・生徒の受け入れなどのねら

シカゴ日本人学校



いで、1978年にシカゴ日本商工会議所（JCCC）によって設立され、双葉会によって今日まで運営されている。2回の校舎移転を経て、一昨年30周年を迎えた。シカゴ市の北西部に位置するアーリントン市にあり、地域住民や関係諸機関の支援や協力を得ながら、全校児童生徒園児約180人が明るく元気に学校生活を送っている。



授業の様子

教育課程は、文部科学省の学習指導要領に基づいて編成しているので、アメリカにいながら日本と同じ教育が受けられる。リーマンショック以来の不景気で、駐在員の減少と低年齢化も重なり、生徒数がここ2年で激減している。しかし、教育内容に目を向けると、その分、少人数クラスでのきめ細やかな指導が可能となり、児童・生徒一人一人に目を向けた教育が進められている。

(2) 特色

①英語教育

- ・小1から
- ・週4時間
- ・能力別
- ・アメリカ人講師

(2) シカゴ日本人学校の特色

① 英語教育

英語教育は、アメリカ人教師を中心に、小1から中3まで、週4時間ずつ、習熟度別（英文法を除く）に英語教育を行っている。1クラスが10人程度の内容の濃い授業である。日本から来たばかりの生徒には、英語の派遣教員や日本語が堪能なアメリカ人教員が懇切丁寧な授業を行い、また、過去に現地校に通っていた生徒や、アメリカ生活が長く英語の堪能な生徒には、アメリカ人教師が現地理解教育的内容を盛り込んだ教材で授業を行っている。子どもたちの英語力は着実につき、中学3年間在籍をするとほとんどの生徒が英検2級を取得するほどである。特に英語での会話に触れる機会が多いことから、リスニングの力の伸びが群を抜いていると感じた。



英会話の授業の様子

②交流学習

- ・年4回

② 現地校との交流学習

小1から中3まで、現地校の生徒と交流学習を行っている。Go（現地校）とCome（日本人学校）があり、Goは、現地校で現地の先生が主体で活動を設定し、児童生徒たちがその活動を通して英語でコミュニケーション能力の向上を図るものである。Comeは、先生と児童生徒が活動内容を考え、準備をし、現地校の生徒と一緒に活動をしている。小1～小5までは年4回、小6と中学部は年2回の交流学習を行っている。

その中で、私が所属していた中学部の活動の様子を紹介したい。日本人学校と同じ町にある「トーマスミドルスクール」と交流学習を行っている。



交流の様子（Go）

ここの学校とは、交流を始めて10年以上になるということで、打ち合わせもスムーズに進むだけでなく、こちら側の願いや要望も快く引き受け入れてくれるなど、中学部にとって欠かせない交流校である。

- ・ペア

交流の際には、お互いの生徒同士1対1のペアをつくり、Go・Comeともに同じペアで活動

<p>・ Go (昨年)</p>	<p>を行い、コミュニケーション能力の向上を図っている。</p> <p>昨年の Go では、交流校の先生が4つの活動の場を設定してくれた。ビンゴゲームとアメリカダンス、ボールゲーム、クラフトである。4つのグループに分かれ、ローテーションしながら全ての活動を行った。活動中はもちろん、ランチもペアと一緒にとっているので、4時間近くペアと一緒に会話をしながら活動をするようになる。</p>
<p>・ Come (昨年)</p>	<p>Come では、和太鼓、ソーラン、長縄、習字の活動を通して現地校の生徒とのコミュニケーション能力の向上を図った。和太鼓では、バチの持ち方や構え方、振り下ろし方などの基本動作から、簡単な曲までを日本人学校の生徒がパートナーに教えた。習字でも、筆の持ち方から文字の形、文字の意味などを丁寧に教えていた。主に現地の生徒に日本の文化を教えるという活動を1対1で行うことは、英会話の力やコミュニケーション能力の向上につながっている。さらには、もっと英会話をできるように合いたいという意欲の高まりにつながっている。生徒たちの感想を聞いても、「たくさん会話ができてよかった。」「喜んでもらえてうれしかった。」「趣味と一緒に話が弾んだ。」など、積極的にコミュニケーションを図ろうとしていたことが伝わってきた。</p>
<p>・ 生徒の感想</p>	<p>③ 現地理解教育 (校外学習)</p> <p>実際に校外に出向いて学習する校外学習として、春秋2回の遠足のほか、近郊にある施設や工場・農場などの見学、さらに修学旅行で小学部はワシントンDC、中学部はボストンへ行くなど、数多くの校外学習を行っている。その一部を紹介したい。</p>
<p>③ 現地理解教育</p>	<p>③ 現地理解教育 (校外学習)</p>
<p>ア 修学旅行</p>	<p>ア ボストン修学旅行 (中3)</p>
<p>・ ボストン (中3)</p>	<p>2泊3日で、飛行機を使用し、修学旅行を行っている。日本の修学旅行のような班の自主研修や体験学習は安全面を考え、開拓の村やマーケット等で班活動を実施している程度である。しかし、その分、時間を有効に使い、有名な観光名所を全て見学している。ボストンは、初期の移民たちが新天地を目指して大西洋を渡り築いた街である。後には、アメリカの独立の舞台ともなり歴史を学ぶのに適した町である。入植当時の様子を再現した「プリマスプランテーション」(開拓の村)やメイフラワー号(大西洋を渡った船)を展示している。そこにいるスタッフは、当時を再現した服をまとい、過去の人になりきった演技で私たちの質問に答えてくれる。生徒たちは、事前に質問内容を考え、英語で開拓の村の人に当時の様子などを質問している。他には、「日本娘」で有名なモネやゴッホ、セザンヌなど有名な作品が展示してある「ボストン美術館」や現役大学生のガイド付き「ハーバード大学」の見学、松坂投手のいるレッドソックスのホームグラウンド「フェンウェイ球場」などの見学ツアーにも参加している。この3日間は、日本人のガイドが同行し、アメリカの歴史から有名な絵画の紹介まで詳しく説明してくれた。日本の詳しいガイドと現地のアメリカ人による説明が充実している修学旅行である。</p>
<p>・ DC (小6)</p>	<p>交流の様子 (Come)</p> 
<p>ア 修学旅行</p>	<p>ボストンにて (修学旅行)</p> 

イ 教会訪問
・クリスマス

小学部6年生は、ワシントンDCに行っている。

イ 教会訪問（教会）

学校の目の前には、教会があり、駐車場の貸し借りの他に、冬期間の避難場所にもなっており、我々との結びつきも深い。この教会に、毎年5・6年生がクリスマス前に歌のプレゼントをしている。今年は、「サンタが街にやってくる」と「マスト ビー サンタ」の歌のプレゼントをした。毎年、子ども達の歌声に涙を流すお年寄りまでいるほど好評で、地域の人もそのことをよく知っている。毎年、手作りクッキーをごちそうになっている。



教会訪問

ウ スキー・スケート・水泳
・アメリカ人講師

ウ スキー，スケート，水泳教室（アメリカ人講師による学習）

アメリカには、運動施設が充実しており、年中水泳ができるのはもちろん、スケートも1年を通じてすることができ。スケート教室は年3回、水泳教室は5回（中学部は4回）実施している。現地のインストラクターが英語で指導している。専門的な指導を受けることができるだけでなく、英会話の学習にもつながっている。

このように、可能な限り現地の人とのふれあいを重視した活動内容を設定している。現地の人との交流や会話を通して、異文化理解を図っているのである。



スケート教室



水泳教室

④ 幼小中併置校の特色

④ 幼小中併置校の特色

ア バスの登下校

ア スクールバス

園児・児童・生徒全員がバスでの登下校となっている。バスの中での安全管理や乗車チェック、座席決め、乗車マナーの指導などは、最高学年である中学生が行っている。中学生が園児や小学低学年の児童に優しく丁寧に指導に当たっている姿が印象的である。そのため、学校の廊下で会った時などは、



「〇〇さん」と声をかけてくる。普通の中学生ではできない園児との交流が毎日行われている。



バス避難訓練

イ 応援合戦

イ 運動会の応援合戦

運動会は、学年・学部ごとに競技が設定されているが、この学校の一つの目玉として、小1～中3までの演技種目、「応援合戦」が行われている。内容は、中学部中心の出し物（踊り）、コール、全校児童生徒の表現（踊り）が中心で、練習時間は全部で7回となっている。中3の応援団長を中心に踊りや



応援練習の様子

コールの内容などを決め、練習計画を立てるのだが、6月の運動会に向けて4月中旬から取り組み始めている。修学旅行や地域のお祭り「ジャパンフェスティバル」、英検などと時期が重なり、生徒にとってはかなり忙しく、そして、小学校低学年の指導など大変なことが多い。中でも応援団の一番の悩みは、応援発表の内容を決めることで、小1から中3までが楽しく踊れる曲を決めるのに、毎年とても苦労している。苦労した1ヶ月以上の取り組みの成果が、運動会の本番で発揮され、感動的な演出を見せてくれる。中3の中には、うれしさのあまり涙を流す生徒までいるほどである。また、応援団中心に合計7回の練習をすることによって、団長の指示に児童・生徒は従い、他の競技中も団長の指示のもとで熱心に応援している。応援団長を中心に優勝目指して必死になって競技に取り組み、また、応援する姿が感動的である。

ウ 保育の授業

ウ 幼稚園児との交流

幼・小・中併置校のメリットを生かし、家庭科では保育の授業に取り組んでいる。バスなどでの普段のふれあいもあるが、この実習で中学生が遊びを企画したり、一緒にお弁当を食べたりする活動を通して、情操教育を行っている。



園児との交流

エ 挨拶運動

エ 挨拶運動

この学校の伝統でもあり、アメリカ人の素晴らしいところでもある挨拶に力を入れて取り組んでいる。毎朝、玄関前で中学部の生徒たちが、登校する園児・児童に挨拶をしている。毎年、恒例となっているため、生徒に活動の意味づけをしてあげることが大切である。生徒会の指示のもと、どの生徒も意欲的に取り組んでいる。



挨拶運動

オ 駅伝大会

オ 朝マラソン&駅伝大会

部活がないことや、バスでの登校など、運動する機会が少ないことが、教員や保護者の心配の種である。中学生に基礎体力を付ける目的で、朝マラソンを行っている。秋には、5人一組のチームを作り、駅伝大会を行っている。小学部も応援に来てくれる。



朝マラソン

カ 文化祭

カ 文化祭

小1から中学部までの劇の発表や小1～小4の英語の歌の発表、中学部はソーランと太鼓の発表、さらには、フィナーレで全校合唱を行っている。お互いに練習の成果を発表



劇



ソーラン



太鼓

・フィナーレ

しあっている。中学生といえども、小学生の上手な演技に驚かされ、楽しみながら発表を見ている。最後のフィナーレの企画は、中学部の生徒会が中心になって行っている。その中で歌う全校合唱は、選曲をするだけでなく、朝の活動の時間に小学部の教室に行き、歌の練習を行っている。

キ 百人一首
大会

キ 百人一首大会

小学5年生以上が、百人一首を競う。個人戦と学年対抗の団体戦を行う。日本の文化を味わうと言うよりも競技性が強く、緊張感漂う雰囲気の中の大会となっている。



百人一首大会

⑤ その他
ア 小1も7
時間授業

⑤ その他「日本の学校とシカゴ日本人学校を比べて」

ア 小1も7時間授業

スクールバスでの登下校のため、小学1年生も入学して1週間経つと7時間授業となる。慣れるのに大変そうだった。

イ 休校

イ 休校になる

年中夏タイヤのせもあり、-20度以下になると、学校は休校となる。道路が凍結するため、スクールバスが走れないのである。また、雪が降っても休校となる。朝方に雪が降った時は、道路の雪を溶かしきれなくて休校となってしまう。雪や寒さのための休校は、毎年、年間2日程度ある。

ウ 避難訓練
・年10回

ウ 避難訓練が多い

トルネードや不審者、火災、地震、そして、消防署が抜き打ちで行うものまで、年に10回もある。日本とは違い、警報機が鳴ると、すぐに外に出て避難をするスタイルである。冬は、外に非難をしても寒さのため危険であるという理由から、近所の教会に非難をする練習をしている。

エ 掃除なし

エ 掃除がない

掃除は用務員の方が全ての教室、トイレ、廊下などを毎日行っている。職員室の掃除も用務員さんが行う。そのため、用務員の方の勤務時間は、夜10時30分までである。

オ 警備

オ 警備システム

誤って警報をならしてしまうと、すぐさま警察がやってくる。誤報の場合は、罰金として数百ドル支払わなければならない。派遣期間中、掲示物がはがれ、それに反応して、警察が来るということもあった。休みの日に学校に行った場合、校舎内の警備の解除など、緊張してしまう。



4 アメリカの教育事情

4 アメリカの教育事情

アメリカの中学・高校で起きる事件や映画、テレビドラマに映し出される学校の様子から、私たち日本人の多くは勝手にアメリカの学校をイメージしてはいないだろうか。そしてそれは、派手な服装を装い、ピアスに化粧、自由気ままに行動をする高校生のイメージではないだろうか？ しかし、実際にシカゴ近郊で見る生徒たちは、



- ・ 礼儀正しい
- ・ 宿題が多い

イメージからかなりかけ離れたものであった。礼儀正しく、しっかりと話を聞き、素直な生徒が多かった。放課後も地域でスポーツに明け暮れ、その後は、宿題に追われる毎日を過ごしている生徒が多い。宿題の量も多く、宿題をこなすだけで約2時間はかかるという。小学校では、プリントでの宿題も多いが、ブックレポートの宿題も多いようだ。与えられたテーマに沿った本を自分で図書館に行って探し、読んでレポートにまとめるといった宿題である。(指定の本を読んでまとめるというものもある。)

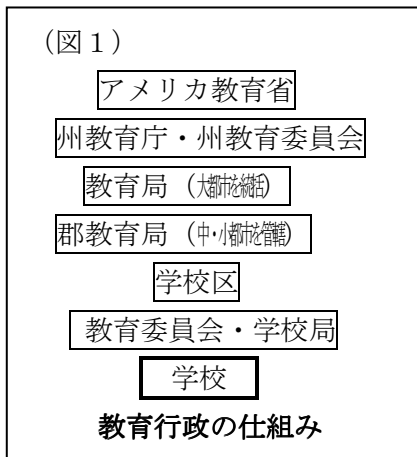
以下、アメリカの教育行政と教育システム、さらには、私が参観した3つの学校を紹介したい。

(1) 教育行政

(1) アメリカの教育行政 (図1参照)

日本では文部科学省が教育に関することを統括し、全国一律で教育が施されている。しかし、ここアメリカの政府は、教育を統括する権限をもっていない。実際に様々なガイドラインを決定しているのは、各州の教育庁・教育委員会である。そして、具体的な教育内容を決め、実施するのが学校区である。学校区が中心となって、カリキュラムや教科書、授業時数、休日などを設定し、特色ある学校づくりをしている。簡単にまとめると、学校区によってカリキュラムに差があり、当然、教育内容にも差が出てくるのである。そこでアメリカ人にとっては、よい教育を自分の子どもに受けさせるために、住む場所選びも大変重要となるのである。

(図1)



・ 学校区


・ よい教育を受けるには

シカゴ日本人学校の近隣の町は、裕福な層の住宅街のため、税金が高いが、教育にかけられているお金も多い。安定した家庭の子どもたちが通い、設備の整った学校で、質の高い授業を受けている。高校も義務教育のため、住んでいる地域の高校に行くことになる。学力の高い高校に行くためには、その高校のある地域に住まなければならない。どこに住むかということが、アメリカで子育てをする上で重要になると感じた。しかし、住む場所を選べるのは、裕福な家庭で、そうでない家庭は、税金の安い町(地域)に住んでいる。

(図2)

アメリカの教育システム

- 幼稚園 4歳～6歳
 - 小学校 6歳～11歳 (1年生～5年生)
 - 中等学校 12歳～14歳 (6年生～8年生)
 - 高等学校 15歳～18歳 (9年生～12年生)
 - 大学・短期大学・専門学校など
- ※身近な学校区(例)

<p>(2) アメリカの教育システム</p>	<p>(2) アメリカの教育システム (図2 参照)</p> <p>日本は全国共通の学年制(6-3)であるが、アメリカでは、6~8年生を中学生としたり、7~9年生を中学生としたりするなど、学校区によって様々である。また、日本では中学3年生までが義務教育なのに対し、アメリカイリノイ州の例では10年生(16歳)までが義務教育となる(州によって異なる)。アメリカの10年生というと、高校2年生にあたるのだが、高校は卒業しなくても義務教育は終了となるため、高校で単位を取らないまま途中で退学する生徒もわずかではあるがいろいろらしい。日本では偏差値などで高校がランク分けされ、入学には受験が必要であるが、アメリカでは義務教育のため受験はなく、自分の住んでいる地域の高校に入学する。高校のレベルも学校区(市・地域)によって大きな差があるのが現状である。</p>
<p>・義務教育(16歳)</p>	
<p>(3) アメリカの学校の様子</p>	<p>(3) アメリカの学校の様子(授業参観)</p> <p>① バー小中学校</p> <p>バー小中学校は、ダウンタウン中心部近くに位置している。危険な町ではないが、日本人が多く住む住宅地よりも白人の割合が少なく、収入の安定していない地域といえる。通学生徒のほとんどがヒスパニック系の家庭で、スペイン語を主言語</p>
<p>①小中学校</p>	<p>としていると言ってよい。全家庭のうち8割以上が貧困家庭で、保護を受けている。アメリカには珍しく給食の出る学校で、保護を受けている生徒は無料で支給されている。</p> 
<p>・日本語の授業</p>	<p>朝、我々が学校に到着した始業前、児童生徒達はグラウンドでキックベースを楽しんでいた。そこで我々が驚かされたのは、児童生徒達が日本語で「こんにちは」と声をかけてくる姿であった。この学校では、週に3時間、日本語の授業を受けているのである。</p>
<p>・週3時間</p>	
<p>・日本語を学ぶ理由</p>	<p>アメリカで最近強く感じるのは、日本語よりも中国語に力を入れているということである。その結果、日本人との交流よりも中国人との交流に力を入れる市や学校が多くなっている。そんな中、熱心に日本語の教育に力を入れる学校があることに驚かされた。</p>
<p>ア 小4授業</p>	<p>不思議に思い、早速校長に日本語教育を推進する理由を尋ねてみた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語の環境にある児童・生徒が一人もいないため、みんなが同じスタートラインで日本語の学習に取り組み始められる。 ・発音がスペイン語と似ていて言いやすい言語である。 ・漫画・食べ物・車など、子どもにとって身近で興味深い文化がある。 ・校長・教頭など、日本に行ったことがあり、日本の好きな教員が多い。(この校長は、教員時代も教頭時代もこの学校で勤務していた。) <p>などの理由が上げられた。</p> <p>授業の始まる前に私が教室に入った時、女の子が描いた日本のアニメの絵を得意そうに見せてきた姿が印象的だった。アメリカのテレビ番組でも、日本のアニメは放映されている。児童・生徒にとって、興味のもちやすい国なのかもしれない。</p>
<p>ア 小4授業</p>	<p>ア 小4「国語」の授業の参観</p>

・宿題

他州との交流校（パートナー）にお手紙を書くという授業であった。生徒たちは書き方のお手本をもとに、自分で内容を考え下書きをしていた。先生はその間、グループを巡回し宿題のチェックをしていた。宿題は指定の本を読んでくることであった。先生は、一人一人に本の内容に関する質問をし、読んできたかどうかのチェックだけでなく、読書を通して考えたことを引き出していた。

イ 中2授業

イ 中2「理科」の授業の参観

火山の学習であった。教師が黒板に項目を書き、生徒たちが知っていることを挙げていくという導入の授業だった。日本だと、発表させ疑問をもたせていくような授業展開になりそうだが、ノートに自分の考えを書き、それを黒板に書いて発表するという、静かな授業であった。私語が全くなく、緊張感も漂っていた。



ウ その他

ウ その他

小学部の方は、授業の終わりに、全員を並ばせトイレと特別教室に移動させていた。並んでトイレに行き、使用したい児童だけが入り、他の児童は廊下で待つという指導の徹底ぶりには驚かされた。

教室環境にも大変興味をもった。子どもたちがたくさん本に目を向けられるような環境になっているとともに、掲示物も多く、授業の振り返りが容易にできる環境ともなっていた。



②中学校

② トーマス中学校

シカゴ日本人学校のすぐそばに位置し、日本人学校の中学部とは10年以上交流が続いている学校である。日系3世の先生が日本人生徒の礼儀正しさに感動し、日本人生徒と交流することに価値があると考え、積極的に協力してくれている。とはいっても、このトーマス中学校の生徒たちは、アメリカの一般的な生徒たちから見ると、よく話を聞き、素直に行動する生徒が多い。また、自分の考えを積極的に伝え、意欲的に学習に取り組んでいる生徒が多い。安定した家庭の生徒が多いためと思われる。




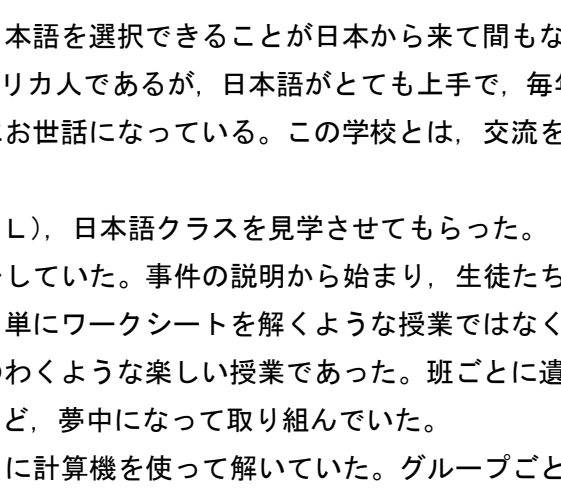
・移動時間5分

生徒は自分のホームルームをもたない。そのため、登校後は自分のロッカーに荷物を置き、1時間目の授業の教室に移動する。日本ではほとんどの授業をホームルームで受けることになるが、アメリカでは、担当の先生の教室で授業を受けている。先生の数だけ教室があるのである。全校生徒がおよそ800名の校舎は、日本で言うと高校ほどの大きさになる。その校舎を5分で移動するのは至難の業であるが、生徒たちは決して遅れない。遅れると成績に影響するだけでなくペナルティーも与えられるからである。

中学校の教科は、必須科目と選択科目がある。主要科目は、毎日決まった時間にあるとい

<ul style="list-style-type: none"> ・成績（全て点数化） ・オンラインで家庭に ・宿題 ・理科の授業 ・ワークシート ・特別支援 ・ESL <p>③高校</p>	<p>う。それぞれの時間の中で、実験、体験、調査、研究、発表など積極的な参加が要求される。成績は、テスト、授業への参加態度、宿題、レポートなどで総合的に判断される。宿題なども全て点数化され、その取り組み状況は全てオンライン上でアップされ、保護者が家庭にしながら把握することができる</p> <p>この中学校で私の専門である理科の学習を見せていただいた。授業の始まる前、プロジェクトでスクリーンに宿題の提出状況が映し出されていた。宿題の提出も成績の一部である。この学校では、1日提出が遅れると70%の点数、2日以降は50%になるなど、基準が示されていた。授業の最初では、宿題の答え合わせや教師の説明があり、その後、厚いテキストを片手に、ワークシートを解いていることが中心であった。実験はあまり行っていないらしい。調べ学習が中心だった。先進国のアメリカでは、多くの実験器具を使った授業が中心と思いこんでいた私にとって、実際の授業にはギャップがあった。物作りや手先が器用な日本人が育つのも、理科だけでなく他教科を含め、学校教育によるところが大きいのではないかと感じた。授業の中で、特別に支援を必要とする生徒には、もう一人先生が指導についていた。一斉学習の中で支援しているスタイルであった。市の教育委員会には障害の程度を調べる検査機関があり、検査結果を基にプログラムが組まれ、それに基づいて学校側で指導をしている。本校にも、対象になる生徒が在籍したとき、無料で検査を行ってくれた。難聴の児童に対しては機材の提供も無料でしてくれた。ただ、日本人学校は公立の学校とは異なるため、市からの人材派遣はできず（できたとしても英語であるが）、カリキュラムや指導方法を教えてくれる程度である。カリキュラムができたとしても、派遣教員数には限りがあるので、それをその通りに指導するのは難しいのが実情である。ここで行った検査結果や指導プログラム、経過は、進学しても次の学校に自動的に引き継がれている。逆に言うと、一度検査を受け診断名がつくと、どの学校に行ってもその診断名が本人について回るといふことらしい。</p> <p>ESLのクラスもを見せていただいた。少人数5名のクラスであった。宿題の答え合わせや、問題プリントを解くというものであった。丁寧に指導していた。ここで英語の力を伸ばし、普通のクラスでもまわりの生徒と同じように授業を受けられるように指導している。そのクラスでは、中国やインド、ヨーロッパや中南米など、いろいろな生徒が学んでいた。</p> <p>③ エルクグローブ高校</p> <p>この学校は、「エルム街の悪夢」のロケ地にもなった学校である。アメリカの高校は、生徒の能力にあわせた学習指導を行っている。能力の優れた生徒は、高校時から大学の内容を学習し、それが大学の単位として認められるだけでなく、入学に際しても有利になる。また、大学入学にあたっては、成績が優秀なことはもちろん、ボランティア活動の参加の有無やサークル活動の取り組み状況も影響してくる。勉強だけでなく、様々なことに意欲的に取り組み成果を上げなくては、よい大学に入学することはできない。</p>
--	---



<ul style="list-style-type: none"> ・日本語のクラス 	<p>この高校でも、多くの先生方が所属し、様々な専門教科を指導しているとともに、能力別のクラス分けも行っている。見学したESL（英語が母国語でないクラス）も3つのレベルで教室が分けられ、テストで合格すると上のクラスに上がることができるようになっている。また、この高校の特色としては、日本語のクラスがあるということである。困ったときには日本語のわかる先生がいること、さらには、第2言語に日本語を選択できることが日本から来て間もない高校生にはうれしいことである。先生はアメリカ人であるが、日本語がとても上手で、毎年、中学部の進路学習の一環として、この先生にお世話になっている。この学校とは、交流を初めて10年にもなるらしい。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・理科の授業 ・ストーリー化 ・数学の授業 ・計算機 	<p>授業は、理科の授業と数学、ESL（ELL）、日本語クラスを見学させてもらった。理科の学習では、警察のような犯人捜しをしていた。事件の説明から始まり、生徒たちが遺留品をもとに犯人を割り出すものである。単にワークシートを解くような授業ではなく、ストーリー化され、生徒たちにとって興味のわくような楽しい授業であった。班ごとに遺留品から指紋を検出したり、血液型を調べるなど、夢中になって取り組んでいた。</p> <p>数学の授業は、与えられたプリントをもとに計算機を使って解いていた。グループごとに相談しながら問題を解決していたが、真剣に取り組んでいる様子はあまりなかった。能力別でいうと下のクラスであった。ただ単に、こなしているという感じがした。全員が計算機を所持することになっており、日本のように公式を覚えて使うのではなく、計算機を上手に使い問題を解くことを重視しているようである。日本人学校から現地の高校に入る生徒で苦労しているのが、この計算機である。クラスを決める判定テストで使うのであるが、使い方がわからないがために問題が解けず、下のクラスにされてしまう場合もあるらしい。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・ESL 	<p>ESL（ELL）は、英語が母国語ではない生徒のためのクラスで、英語を毎日数時間教えてもらっている。この学校では、能力別のクラスが1～3まであり、このESLを早く卒業することが、高校での単位を履修するのに鍵となる。私は、下のレベルのクラスと上のレベルのクラスの授業を参観させてもらった。この2クラスの大きな違いは、生徒の資質の違いであった。下のクラスは、プリントをもらいパソコンを使用しながら取り組んでいたが、おやつを食べ、勉強をしているのか友達とおしゃべりをしているのか、見分けがつかない状況であった。ちょうどそのクラスに今年来たという日本人が1人いて、声をかけたところ、いつもクラスはこんなだらけた様子で勉強にならない。早く上のクラスにいけるように勉強を頑張っていると言っていた。テストでよい点数がとれると上のクラスにあがれるらしい。ちょうどこの日がテストの日で、テスト会場に向かうところだった。テストは、パソコンを使い問題を解くスタイルだということだった。</p>	

・能力別

次に上のクラスを見学した。長文を読んで問題に答えていた。全員が教員の話に集中して聞いており、1つの質問に対して、たくさんの生徒が意見を交流しあっていた。このESLにおける生徒の差は、生徒自身の意識の差とともに、格差社会の影響もあるのではと感じた。それと同時に、アメリカは勉強を頑張った生徒は上のクラスにあがれることも実感した。日本の高校の制度とは大きく異なる点である。



・サポート体制

日本語クラスでの授業は、会話が中心だった。見学させてもらったときは、高校生が私たちに日本語で質問をし、私たちが答えるということをした。会話はゆっくりであるが、どの生徒も上手であることと、真剣に学習に取り組む姿に驚かされた。また、毎年数名ずつ足利市と交換留学を行っていることから、日本が好きな生徒も多いことがわかった。

学校を見学していて、感心したところがあった。それは、宿題や学習のサポートをしてくれる教室がたくさんあることである。そこには、専属の先生がいて、生徒が自由に現れ、勉強したり、質問をしたりすることができるのである。多くの生徒たちが、空いている時間、その教室を利用するらしい。

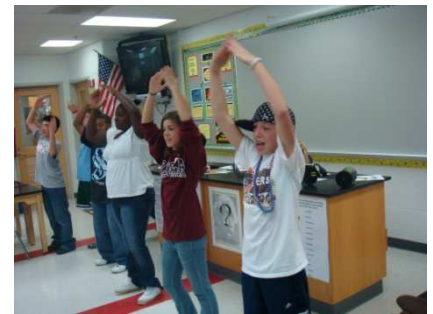
⑦まとめ

⑦ まとめ

最後の年の夏に、アメリカの現地校に6年間通っていた中学3年の生徒が転入してきた。分からないことは進んで質問し、自分の考えを積極的に述べていた。さらには、行事などの活動に対しても、常に自分の考えをもち、友達と意見交流をして進めていた。論理的に考え、説明する力、そして、相手の意見を聞く力が日本の学校を通っていた生徒よりあるように感じた。また、自分の趣味をもち（その生徒はドラムでした）、夢中になって取り組んでいた。日本の子どものように、みんなと一緒にしなければならないという考えはなく、自分のやりたいことに取り組み、親しい友達も所属したサークルでできているように感じた。



また、子育てを終えたアメリカ人と高校入学のシステムのことでも話題になったことがある。アメリカは、レベルによる授業のランク分けはあるが、勉強を頑張れば上のクラスに上がっていきける。でも、日本のように高校そのものをランク分けしてしまった場合、一生懸命勉強しても、上のレベルの学校に上がることはできない。「これはシステムとしてよくないのではないか。」と言われた。知識偏重型の教育になってしまうのも、受験システムによるところが大きい。それが、現在では小・中学受験が



ら始まる。アメリカの教育は日本と比べ、物事を広い視野で学んでいく。授業の中や宿題で本をたくさん読むことを要求される。そして、調べたことを通して、それぞれの角度から意見を交流しあっている。その態度や内容が点数化され成績につながる。日本では、どちらかというと狭く深く追求した教育内容で、さらに受験を目の前にすると、より一層どこまで深く理解したかが要求され試される。合否もペーパーテストで決まる。アメリカ人が表現力に優れ、困っている人に優しいのは、授業でそのことを大きく求めたり、ボランティア活動を重要なものとして位置づけたりしている教育によることもあるのではないかと感じた。

5 アメリカの施設

5 アメリカの施設

(1) 科学産業博物館

(1) 科学産業博物館

この博物館は、約3万5000点の展示品が並び、子どもにもわかりやすく、実物や体験を通して科学や産業を習得してもらおうという趣旨の展示内容となっている。アメリカの科学技術を、基礎知識、人間の体、地球資源、アメリカでの生活（商業と文化）、21世紀の燃料、伝達手段、交通機関などのセクションに分けられている。とても1日では、回りきれない広さである。



とても1日では、回りきれない広さである。

① 人体

① 「人体」

この科学館の目玉コーナー。するための50以上の体験型展示がそろい、子どもから大人まで楽しめる。中でも必見は、人体の輪切りである。献体に同意し自然死した男女の遺体を凍らせてカットしたものである。もう1つ見逃せないのが、胎児の成週と5日目までの胎児。24の段階に分けて順を追って展示がされている。これは本物ではなく、全て本物であるから驚きだ。



を探求す

から37

はなく、

・人体の輪切り

・胎児

② 自然

② 「自然（トルネード）」

この科学館の最新コーナー。まず目につくのが、巨大トルネード発生装置と雷発生装置である。トルネードの発生するしくみや形、移動の仕方などが体感できるような展示になっている。また、このコーナーには、津波の原理と危険性、コンピューターグラフィックを用いた花火の作り方（炎色反応）、光ファイバーなども展示しており、来場客を楽しませてくれる。



・トルネード

③ 「ドイツ潜水艦（U-505号）」

③ 潜水艦

第2次世界大戦中、西アフリカ沖で捕されたドイツの主力潜水艦が丸ごと屋内に展示されている。迫力満点の展示物で、内部を見学するツアーもある。

・ドイツの潜水艦

以上、数カ所のコーナーの紹介でしたが、他にはアポロ8号の展示や蒸気機関車999、ひよこのふ化、クローン、炭坑採掘現場の実物大模型など、様々な展示がしてある。ここまで充実している科学館は、日本ではお目にかかれない。

(2) シェッド水族館

(2) シェッド水族館

八角形をした水族館は、世界各地の海岸からなる6つのギャラリーと中央に展示してある巨大水槽(約34万リットル)、オーシャナリウム(イルカ、ベルーガクジラのショー)からなる。ここで飼育されている海の生物は約150種、約2万2千匹。世界中から集められた海の生物は、熱帯魚、海水魚、淡水魚などの一般の魚類に加え、タツノオトシゴから電気ウナギ、アマゾンのピラニアなどの珍種の魚類、海洋生物、両生類、は虫類、昆虫、海ほ乳類など、単なる水族館に留まらない幅の広さである。



6つのギャラリーでは、世界のエリア別に水槽を分けてあり、それぞれの地域の環境を再現した水槽となっている。

・世界のエリア別展示

中央の巨大水槽では、ダイバーが餌づけをしながら魚の名前や生態を紹介している。

この水族館は、巨大なスペースを生かし、世界各地の環境を再現し、展示しているのが特徴である。ただ単に水槽の魚を見るのではなく、どんなところで生息しているのかも実感できるようになっている。

(3) フィールドミュージアム

(3) フィールドミュージアム

全米屈指の自然史博物館である。収蔵品総数は2000万点にも及ぶ。展示分野は多岐にわたり、地球の誕生から現代にいたるさまざまな自然遺産や文化遺産を網羅している。中でも恐竜の展示は素晴らしい。



・スー

中央ホールには Sue (スー) というティラノサウルス・レックス (T-レックス) の化石が展示してある。長さ 12.8m、高さ 4m、の巨大なものである。この化石は、現在発掘されている (T-レックス) の中で、最大かつ最も完全に近い形で発掘されたものである。



(4) シカゴ美術館

(4) シカゴ美術館



メトロポリタン美術館、ボストン美術館と並ぶアメリカ三大美術館の一つである。有名な作品が数多く展示してある。スーラの「グランド・ジャット島の日曜日の午後」をはじめ、ゴッホやモネ、ゴーギャンなど、美術の教科書に載っているような作品が間近で見られる。

6 生活事情

アメリカ人は、本当に移民の方や英語のでき



6 生活事情

・ 優しさ

ない方に優しい。お店に行っても、すごく親切に対応してくれる。これだけ英語のできない私が何不自由なく生活できるのも多くの移民を受け入れてきたアメリカだからこそだと感じた。銃社会とは言っても、近所やお店を歩く人は持っていない。日本のような交番はないが、道路には何台ものパトカーが巡視している。

以下、様々な観点でアメリカの生活の一端を紹介したい。

(1) スーパーマーケット

日本食も手に入りやすいのが、生活を楽しんでくれた。日系の大きなスーパーが日本人学校のそばにあった。日本より割高ではあるが、調味料や冷凍食品など、ほとんどの物がそろっていた。パン屋や本屋もあり、なんとそのスーパーのフードコートには、旭川で有名な「山頭火」までも入っていた。



(1) スーパーマーケット

・ 日系



・ 山頭火

また、アメリカだけではなく、韓国や中国、イタリアやロシアなど、いろいろな国のスーパーも充実していた。



(2) リード・トゥ・ラーン

私が大変お世話になったのは、「リード・トゥ・ラーン」という英語ができない人のための地域でつくられている英語クラスである。料金は無料で、1対1で週に1度、2時間半も英語を教えてくれる。英語ができなくて働くことや生活に支障を来すような人を優先にこのクラスに参加させてくれよう、はじめにある英語のテストで高得点を出すと授業には参加させてもらえない。ここでは、英語の単語はもちろん、1対1の指導のため、生活に関することなども質問しやすく、助けられることが多かった。授業の内容も1対1なので、生徒に応じたカリキュラムを組んでくれた。3年間通じて同じ方



(2) リード・トゥ・ラーン

・ 英語のレッスン (無料)

・ 週1回

・ 2時間半

とレッスンを受けられたことも大変よく、家族ぐるみのつきあいになれたことも大きかった。

(3) 格差社会

アメリカに来て強く感じたのは、格差社会である。日本の会社にとって、人を雇うことに1番経費がかかる。しかし、アメリカはそうでは



(3) 格差社会

ない。モールやディーラー、スタンドなど、身近な生活に目を向けると、どこにでも多くの従業員がいる。近く of 洗車場を例に挙げると、洗車をし

・人件費の安さ

てもらい拭いてもらって5ドルである。室内のクリーニングを入れると、さらに驚きの全部で7ドルである。我が家の庭は、毎週金曜日に草刈りに来てくれる。家のまわりのゴミ拾いもしていつてくれる。冬は雪かきをきれいにしてくれる。まじめに働く姿が大変印象的である。聞いたところ、これらの従業員の賃金はすごく安いらしい。だからこそ、洗車場やレストランなどでは、チップを渡すべきと知人から教えてもらった。これらの人は、ヒスパニック系の方が多い。自分の国と比べるとそれでも給料は高く生活もよいらしい。しかし、真摯な働きぶりと対照的な賃金の安さに世界の経済の実情を感じた。

・チップ

(4) クレジットカード

日本では、申し込みば何枚でも作れそうなクレジットカードであるが、アメリカでは、なかなか持つことができない。最近、リーマンショック以降、オバマ大統領になってからは特に厳しくなってきた。クレジットを申し込むと、今までの履歴を審査され、その結果、作れたり作れなかったりする。カード社会のアメリカにいて、カードがないととても不便である。

(4) クレジットカード

(日本のカードも使えるのですが)

(5) ネット社会

日本でも進んできてはいるが、買い物から予約、支払いに至るまで、何でもインターネットでできてしまう。学校とのやりとりもメールが中心になっている。社会教育のスポーツでも、申込から支払い、練習日程や試合日程など、全てにおいてインターネットで行っていた。日本人学校においても、親同士の情報交換の場としてインターネットが使われていた。家庭での普及率の違いだとは思いますが、日本ももっと進めばよいのにと感じてしまう。

(5) ネット社会

(6) 生活の不思議

① 夏タイヤ

冬でも夏タイヤである。北海道出身者にとって、初めて聞いたとき「走れるわけではない。」と思い赴任した。しかし、3年間、夏タイヤで過ごした。その秘密は、雪が積もると、塩を積んだ何台ものトラックがまき散らすのである。塩のおかげで凝固点が下がり、雪が溶け凍らないのである。北海道では冬道は雪煙がたつが、シカゴは塩煙がたつほど道路は塩だらけだった。



(6) 不思議

① 夏タイヤ

・塩

② 子どもを守る法律

アメリカには、子どもを守る法律がたくさんある。州によっても違うと思うが、日本にはない法律がいくつかあった。(以下、住んでいた州の法律)

②法律

・留守番

・外出

・車

- ・子どもだけでお留守番禁止～13歳になるまで、子どもだけでお留守番をしてはいけない。調味料一つ買いに行くのにも、子どもを連れて行かなくてはならない。
- ・子どもだけの外出禁止～15歳になるまで、子どもだけの外出はできない。どこに行くにも親と一緒に、友達の家に行くのにも親がついて行くことになってしまう。(中学生にとっては窮屈)
- ・助手席に子どもは座れない。
- ・一20度以下の日に外で遊ばせてはいけない。
- ・父親が娘とお風呂に入るのはダメ。小さくても子どもの裸の写真は現像できない。
- ・大きい声で子どもが泣くと、警察が来る。

③ ゴミの分別

アメリカ人は、家庭でゴミの分別はしない。アメリカ人にゴミの分別の話をする、「やっているよ。」と言う。家庭ではしないが、ゴミ処理場で、従業員が分別をしているというのである。さらに驚きは、ごみの量である。どの家庭も大量のごみを出す。しかも家具やタイヤなど、なんでも出せる。ごみとして何でも容易に捨てられることが大量消費、個人消費の助けになっているようにも感じた。



③ゴミ

7 おわりに

アメリカで経験してきたことを中心に、その一端を紹介させていただきました。シカゴ日本人学校では、素直で明るい子どもたちに囲まれ、充実した学校生活を送ることができました。さらには、3年間、中学生への進路指導という貴重な経験もできました。また、多くのアメリカ人と出会い、アメリカ人のよさに触れる経験も数多くすることができました。ここでの生活は、自分の仕事の仕方や生活の仕方を見直すよい経験になったと思います。

3年間貴重な経験ができたのも、当会の先生方はもちろん、現地で出会った人など、多くの方々の支えがあったことをいつまでも忘れずにいたいと思います。

これからは、アメリカで経験したことを少しでも生かし、実践していきたいと思います。

7おわりに



